



神田每実（かんだ・つねみ/1958-） ステップス初個展である。神田は愛知県立芸術大学を卒業し、今日では同大学の教授である。私は初めて作品と接触した。

画廊内の壁三面の大凡目の高さに、作品が貼り付けられている。上部が青、下部が赤に塗られている。照明は点いていない。自然光のみが頼りとなる。

用意された椅子に座り、作品を見続けていると、壁面上部に青、下部に赤が薄らと浮かび上がってくる。壁からせり上がっている部分は気にならないから、奥行きは生れない。それよりも青と赤の間にある白が、白過ぎることに気がつく。その場に居合わせた神田に話を聞くと、画廊内全ての壁面を白く塗り直したという。

「気配」や「空気」が重要であると神田が言った気がする。すると何も無い、画廊に入って左の壁面の為に作品が存在しているような感触を感じる。

しかし壁に囲まれた、閉じられた空間にこの作品は収まらない。事務所に展示された多数の作品も画廊内の作品と制作意図は同様であろうが、ビルそのものを突き抜ける。

あることがないこと、ないことがあること。それは実体と虚像や存在と無、実存といった「不気味」な対比ではなく、もっと自然に、我々が接している何かであると私は感じた。事務所内には、日用品をモチーフとした作品が棚置き、壁

掛けと、所狭しと犇きあっている。

その対比に、はじめは唾然としたが、場にいることで、次第に慣れて来る。見慣れている日用品こそ、特殊と思われる作品に比べて「不気味」さが増す。

更に神田の作品と思想に触れていきたい。

